二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

銃忍 JUNINGUNCROSS ガンクロス

小説 コトキケイ
挿絵 篠塚醸二

第一章　銃忍法炸裂!!　姫とくノ一　006
第二章　姫くノ一見参　064
第三章　魔城にて姫くノ一、油淫獄に滑り墜つ　085
第四章　囚われの姫くノ一、針絶頂に噎(むせ)び啼く　130
第五章　暴かれし姫くノ一、魔獣責めに都燃ゆ　178

登場人物紹介

Characters

藤堂(とうどう) 紗由璃(さゆり)

羅黒に打倒された幕府将軍家の忘れ形見。自由気ままに振る舞うが、道理のないことは嫌い。

音子(おとね) シア

音子衆銃忍。異人の血を引く混血少女くノ一。冷静沈着で、ずば抜けて高い戦闘力を持つ。

羅黒(らこく)

幕府を倒した新王。我狼衆魔忍を率いる。

百足姫(むかでひめ)

全身に触手を纏わせた少女忍者。

針ノ巫女(はりのみこ)

我狼衆の一人。針で死人を蘇らせて操る。

鬼子童(おにごわらし)

巨漢の大鬼。

そう知れれば益々羞恥が増してきた。発情とは牝が異性を求める本能。それがいま紗由璃の中で芽吹き、乾燥した草地を蹂躙する野火のように一気に拡大していた。自覚することによって身体はさらに淫熱を増し、得体の知れない気持ちよさが全身を巡った。

「ゲゲ、肉欲に耐える娘の顔はそそるのぉ。そら、我らの一物も力が漲ってきおった」

「……ば、ばか者！　そ、そんなの、見せなくてよい……っ‼」

周囲の小鬼たちが股間から一斉に陰茎をそそり立たせた。

陰毛に隠されていた肉槍がここぞとばかりに天を向き、短躯とは裏腹の逞しい男根を披露する。皮の捲れた先端は赤銅色に鬱血し、放出の瞬間をいまかいまかと待ち受け、びくびくと震えていた。小鬼たちは己のものを誇示するように根本からしごき始め、とろとろと濡れ光る先走り液を滴らせる。縦穴に籠もる気化した魔油の臭いに新鮮な牡の淫液が混じり合い、紗由璃は常態を保つのが困難になってきていた。顔を真っ赤にしながら思わずごきゅり……と唾を嚥下する。

「……ゲッゲ、そら、これが欲しいのじゃろう、銃忍よ……無理をするな……我慢をすることはない……牝が牡の一物を求めるのは自然の摂理なのだからのぉぉ……」

「ん……くぅ……ぁ……ぁぁ……ぁ」

小鬼の低い声音が縦穴の内部に跳ね返って紗由璃の耳朶から脳内に染みる。魔油の強烈な臭気が鼻孔から忍び込み、意識を酩酊させる。どくんどくんと爆ぜるように鳴る心音が

呼気を子犬のように速める。大量に嚥下した魔油のこってりとした苦みが腹の中で膨張して吐き気を催させた。紗由璃は堪えきれずに「けぷ」と小さくげっぷをする。内部を汚染した臭みが逆流して鼻の裏側を引っ掻き、さらに意識を混濁させる。

「……んぅ……んん……はぁふぅ……」

いつの間にか紗由璃は両手も胸も解放されていた。ぺたりと内股で座り込んだまま前屈みになり、ぬるぬると下半身を滑らせ、屹立する肉槍に自然と迫る。炎に惹かれる蛾のようであった。浅瀬に密着した股間が擦れ、それだけで気色がいい。目の前に赤銅色の急角度が近づくのに合わせて、肉欲は限界に達した。

「はぁ……はぁぁ……んふぅ……ん……」

無意識のうちに首が前に伸びる。唇の紅い上下が震えながら開いて舌が突き出された。先走りに濡れて傘を開く亀頭へ舌先が遂に触れる――前に紗由璃は最大限の理性を働かせて口を閉じた。限界まで首と背を反らし、危険な肉棒から「んんっ」と身を離す。

透けた乳房が抗議するようにぶるりと蠱惑的に波打った。

「ゲゲ⁉　な、なんと……っ」

「はあ……はあ……わ、私を堕落させようとしても、む、無駄だ……。オマエらのゲスな暗示などにはかから、ぬ。待ってろ、すぐに全員退治して……してやる、から……」

紗由璃は風邪で熱に悶えるように顔を真っ赤にし、周囲の小鬼たちに告げた。

「グゲゲ……我らの暗示の術にも堕ちぬとは……しかしもう肉の疼きは限界に達しているはず……。あとちょっと刺激を加えてやれば……ゲゲ、簡単に求めてくるわい……」
「んんぅ！　やぁ、やめろ、ばか……いた、んん、ふむむぅーっ」
股間を勃起させたまま目の前の小鬼に髪を鷲掴みにされ、強引に猛る牡の尖りを味わわされる。熱に浮かされ満足に動けない紗由璃の口に、ぬちゅる。先走りを漏らす亀頭が押しつけられ、接吻を強制してきた。シアの唇に残る紗由璃と交わした口づけの記憶に牡の苦みが重なって上書きされ、泣きそうになる。それでも弱気を振り払って唇を一文字に結び、蹂躙を拒み続けた。同時に溶岩の塊のような肉棒の熱さに頭が茫となる。
（これが、牡の……すごい……におい……それに、あ、あつくて……）
ぬるぬるり。
引き結んだ口唇の合わせ目に沿って肉槍が右に左に擦りつけられ、紗由璃の唇から朱に染まる頬までを鈴口に滲む粘液で汚した。
「えぇい、強情な娘よ、ゲゲ、そらいい加減銜(くわ)えるがいいっ！」
「ん……やめぇ……んん……ん……ぅむむむむーっ！」
小鬼の指が紗由璃の鼻を摘む。息が遮られたまらず口を開いてしまう。その隙に紅唇の上下を割って無遠慮な肉の塊が口内に押し入ってきた。
「ふぐぐ……んぐぅ！　ん……むぶぅぅぅ!!」

反り返りの胴体の表層を紅唇の輪が滑り、唾液で濡らしていく。小鬼の性器は長さもあれば直径も大きい。自然と顎が外れるくらい口を開かされる。その肉の塊の重圧が舌の上を通り、口蓋を擦り叩き、滲む牡汁の臭いを鼻の裏に突き刺してきた。攻撃的な肉の圧力が喉の奥にまで達する。息苦しくなるまで飲み込まされ、それからぬぬぬっと唾液で濡れ光る赤銅色の胴体が抜かれていった。そしてすぐに暴れる舌をひき殺しながら、肉の暴力が喉の奥まで帰ってきた。

「……おぶぅ……ぉご……んぅぅ……ぇぇ……」

紗由璃は何度もえずかされる。胃液が喉元まで迫り上がって苦みが増した。

（くくっ……こ、この下郎め、調子に……乗りおってっ……！）

小鬼の両手が紗由璃の頭の二本尻尾をがつりと掴み、激しく腰を打ちつけてきた。ぬろんぬろん。屈辱の猛りが紗由璃の口を欲望の捌け口に躾け直していく。根本まで紅唇の輪が達するたびに、刺々しい陰毛が小鼻の孔を擽った。

「ゲゲ、どうじゃ、どうじゃーっ！　うぬが皆殺しにしようとした魔物の、これが一物じゃ。おおう、たまらん、これはたまらん絶妙の口の感触じゃぁぁーっ!!」

「ぐぶぅっ……んぐぅっ、んんぶぅ！　ふぅ……ぐぐぐぅ」

紗由璃は顔を真っ赤にして抗いの気を発する。一物を銜え込まされたまま、怒りの上目遣いで小鬼を睨みつけた。上手く力の入らぬ両方の掌で拳を作り、敵の腹や太腿を子供み

たいにぽかぽかと殴り続ける。だが小鬼は節くれ立った掌でがっちりと頭を固定し、無理矢理に前後運動を強いた。
「ふぅぅぅんぅ……くんぅ……ぶぶ……むんぶぅ……」
「おお、そうじゃ、たんと舐めろ、これがうぬを支配する我らが一物じゃ……ゲッゲ」
頭の揺れる振動に透けたままの乳房もたぷたぷと波打つ。里のくノ一や、喰われた娘たちの敵になぶられ、怒りで身を焦がしているはずなのに、胸の双乳は波立つ刺激に先端の突起を完全に起き上がらせ、口内を支配するかちかちの感触より硬く尖っていった。
（な、なんでだ……こんないいように……されて、いるのに……）
獰猛な抽送に唾液が口元からぽたぽたと溢れ、透明な胸元に滴り落ちていく。紗由璃自身の粘つきが胸の果実の曲面に沿って流れ、屹立する乳首の先から淫らに滴った。
「グゲゲ、そろそろイクぞ、我らの怒りをくれてやる、受け止めろ、駄犬っ！」
「ぐむむぅ……ふぐっ……んんんんぅーっ……あぶ……んぶむぅぅ!!」
口の中で猛りが爆発した。
びゅくりびゅくびゅくくくくぅぅ！！！
大きな胴体がさらに一回り膨張し、上向きに跳ねて口蓋を叩いたかと思うと、喉の奥のほうで多量の灼熱が噴火する。熱い飛沫が口腔を焼き、喉奥に流れる粘りが食道を爛れさせていく。紗由璃は自然と粘つきを嚥下させられた。小鬼の射精は長く、しつこく、なか

『第四章　囚われの姫くノ一、針絶頂に噎び啼く』より

黒い瞳が爛々と嗜虐の光を放ち、整った鼻梁の頭を紗由璃の小鼻の先にぐりぐりと押しつけてきた。紅と白の少女二人の視線が真っ向から絡み合う。

「くっ……ぅ……こ、この、莫迦巫女……ばか……ば、ばか……ばかぁぁ……」

顔を朱色に染めた紗由璃は直接の問いに答えず、答えられず、碧眼に怒りを込めて睨み返した。

「おおぉ……よいのぉぉ……その調子じゃ、わらわをもっともっと罵っておくれっ！」

針ノ巫女が舌先をちろりと出し、紗由璃の鼻先を犬みたいにぺろぺろと舐める。

（っちがう、私はいじめられて気持ちよくなど……!!）

虐げられる身体は胸の内とは裏腹に、高ぶるまま熱気に支配されていく。腹に妖酒が完全に染み渡り、汗にまみれた白い肌が肉感的な桜色を帯びた。本来鈍感なはずの直腸が肉壁をじわじわと溶かされ、性感の神経を剥き出しにされる。裏性器の本性が暴かれる。

「い、いじめられて……き、きもちよくなど……」

ぞくぞくとした。浣腸を施されて感じている。感じてしまう。気持ちがいい……。

「ふぅぐぅ……ん……んんぅ……んくんぅぅ……っ！」

「おお……ほんにたまらん……羞恥を押し殺した凛々しい阿呆顔じゃて……淫虐に堪える娘の美しい顔立ちこそ、至高の芸術の体現じゃ。そうであろ、銃忍よ」

「うぅ……うる、うるる……うるさぁ……い……はあぁ、はあぁくぅぅ」

舌が回らず、増大する便意の悦楽に紗由璃は意識を別世界に飛ばしそうになった。
（こ、こんどはでる……でてしまう……な、中身……もる……もって……しまう。こんな状態で、ん、出したら……きもちいいままで……出てしまったらぁ）
紗由璃は燃え立つような腹の灼熱を孕んだまま、尻孔を鉄の硬さで締め閉じ続けた。出てしまうことよりも、出すことによって戻れない被虐快楽を経験してしまうに違いないという予感と恐れが、真っ赤にした顔と喰いしばった紅唇で紗由璃を耐えさせ続けた。
「もっと忍ぶ美しさを見せておくれ、銃忍。そら、この見事な乳房も……」
縄で絞り出された巨乳の片方がぎゅぎゅむ。針ノ巫女に掴まれた。もう一方の手には煌めく銀針。縄で歪む胸果実を掴み、銀針の尖りが半起ちの乳首に鋭く打ち立てられた。
柔らかな肉ぽっちは紅の装束越しに銀色の針の長さを縦にめり込ませる。我慢に集中していた紗由璃は想像していなかった不意の責めにびっくりして悲鳴を迸らせた。
「⁉　……だ、だめ、だ、ちくびぃぃ、ぁ、あいぃぃぃっ！」
髪の毛の極細を持った針がずぶりずぶりと深く穿たれ、半分以上起ち上がっていた乳首を犯した。痛みはないが、むず痒さが縄に絞り出された胸の根本から肉の半球全体に広がり、針を刺された部分に熱量が集中していくのが判る。熱い、胸がどんどんと熱くなっている。針に敏感な柔肉の中身を犯され、乳首がびくりびくりと屹立を増した。勃起の盛り上がりが自ら進んで長針の鋭さを脂肪の深みに飲み込んでいく。

「こちらの愛らしいぽっちにも……ほほほ」
もう一方の乳首にも針が縦に通された。それはただの針責めではない。死針術は身体を自在に操る魔技である。針を縦に通された刺激に応えるように乳首が燃え立ち――。
「む、むねぇ、あついぃ、あつっ……ぁああ……くぅぅ」
溶け崩すような熱に、縛りで歪んだ美半球が震えた。
「ほほほ、安心するがよい、乳腺を刺激して乳蜜を出しやすくしてやっただけじゃ。感じれば感じるほど、漏れ出してこよう。牡根の射精のようになぁぁ」
「はぁっ……そ、そんな、の……ふぅぅ、ふぅ……だ、め……ふぅひぃぃんぅ！」
針ノ巫女が針の刺さったままの乳首をぴんっと弾いた。
「本当の屈辱はこれからじゃ。愛奴たちよ、銃忍を吊し上げよっ！」
「ひゃっ⁉　う、うごかすな……ぁ……だ、だめだ……ほんとにぃ……んんんぅーっ」
腰の後ろの鉤針が外されると、頭上の滑車が勢いよく巻き上がった。
「く……っっ……がぁあああーっ！」
「ほほほ、段々よい囀りになってきたのぉ。そら、もっと声音に彩りを添えなされ！」
ぎぐゅるるぅと腸が大きく鳴り響き、排泄欲に再び向き直させられる。
限界まで堪えようと全身の筋肉が強ばり、針が刺さったままの双乳が揺れまくる。根本が絞られているので揺れ方もぶるんぶるるんといった激しい感じになり、突き出したまま

の尻も、肉の大迫力の揺れに少し遅れて銀の残像の振幅を増した。
（シア……シア……シア……シア……たすける……シアをたすけ、ない、と……）
混濁する意識の中で明確な道しるべを求め、シアのことだけを思い出して己を保とうとした。なぶられる身体の抗力は減退し、黒い怒濤の感覚が心を蝕んでいく。筋肉の引きつれが頭の天辺から爪先までの全身を波打つように痙攣させた。
我慢すれば我慢するほど、肛門の中で気持ちよさが膨れ上がっていった。
（たっ、たすけだす、たすけ、だす……だすぅ、はぁ、はあ、だしたい、お尻の……）
下半身から広がって全身から爆発しそうな喜悦を、緊縛格子が押さえ込む。縄と縄の間からとろけ出す餅肉が量を増やし、喰い込みを激しくしていった。
「もうそろそろ限界かえ？　ならば存分にひり出させてやるわ。腹の中に出した汚濁を元に戻してもらおうか。この妖酒の瓶の中になぁぁ」
白濁を満たした瓶が吊し上げられた紗由璃の側に運ばれる。腹の内部は爛れきり、いましも尻の孔が力なく開きそうだった。すっかりと弱体化した紗由璃の両脚が包帯娘たちによって持ち上げられ、大股を開かされる。紅の忍び装束の細い革地が慎ましやかな股間の秘裂を噛み、ふっくらとした淫唇をはみ出させた。
「ぁ……だぁ、だめ、だ、この格好、は……あぐぐ……」
いまだ噴出を拒む尻孔の様子も完全に露呈させられる。

「この瓶は特殊な陶器でできておる故、中になにを出しても周りに被害が及ぶことはないぞ。爆薬でも糞でもたっぷりと出せ、銃忍。わらわたちが見守っているぞよ」
紗由璃の尻が包帯娘たちにすくい上げられ、その下に瓶が移動する。
「や、やめろ……わ、私はぜったいに、漏らさない、から……な」
支えがなくなり紗由璃の尻だけが瓶の口を通り、どぼりと液体の中に沈んだ。妖酒の成分が尻肉の表面からも染み渡り、柔らかみを増大させる。臀部がしっかりと瓶の口に填まると酒精に沈んだ桃肉の曲面をぬるりとなにかが撫でた。
「んくぅぅ⁉　な、なんだ……なかに……なにか……いぃ……はくぅ⁉」
ぬるりぬるり。おかしな感触が陶器の口に填まった尻肉全体を舐め回し、紗由璃をぞくぞくとさせる。柔らかくも硬さを感じさせる細長い物体が剥き出しの肛門口をまさぐってきた。決壊間際の肉皺を解き放とうと、尻孔の中心をぐいぐいと強烈に押してくる。
「ほほ、この瓶の中には百足姫から採取した触手を培養してあるのじゃ。それ、たんと尻孔を締めねば、触手が直腸内を掻き回してしまうぞ！」
「そ、そんなの……んん！　はぁ、はぁ……んはぁぁ‼　くぅあああぁぁーっ！」
白濁の水面下で暴れる触手は一本ではなかった。何本もの感触がしなりを効かせて紗由璃の柔らかな臀部に沿って己を擦りつけ、尻たぶをぐいっと開く。屈辱にひくつく肛門の周囲をぬるりぬるりと舐めなぞり、緩い刺激を紗由璃に伝えてきた。悦楽という爆弾を内

包している尻孔にはたまらない、ねちっこい愛撫である。
「んくぅ！　やぁ、やめろぉ、はあ、はあ……こんなの……こんなのぉお……」
ぐるるるぅと腹が鳴り、肛虐の刺激に便意が助長される。さらに括約筋の締まりをこじ開ける強力な穿孔が、紗由璃の力みを蹴散らした。我慢に我慢を重ねきっていた皺を容易く引き伸ばし、指先ほどの太さの触手が肛門に捻り込まれてくる。
「っっ……ふぅひぃぃんぅーっ！　ふぅはっ、にぃぃぃあ、ぁ、あひぃぃ!!」
裏性器となった内部を擦り上げながら、ぬるぬるとした異物が直腸筒を遡ってきた。排泄間際の肉孔に挿入される強烈な暴虐。紗由璃はびくんと激しく仰け反り、瓶の中で尻を悶えさせた。狭い陶器の中の出来事である。逃げ場はなく、瓶の口の縁に投げ出したブーツの先をびくんびくりと暴れさせるだけだった。
「やぁ……やめ……こ、こんなの……た、たえられぬぅぅーっ！」
出入り口間際まで下りてきていた直腸の中身ごと、ぐりんぐりんと捻りを効かせて攪拌される。気持ちよさと汚物の熱気が溢れ出そうとする限界と混じり、苦しさと快楽の境目がなくなっていく。便意がどんどん愛しくなる。
（すぅ、すごいこれ、お尻、こんなにすごくなって……っっ！）
暴れる触手を括約筋の強烈な収縮が便意ごと捕らえて締める。すると今度は我慢熱が上昇して胸の房を下側から叩いた。絞り出されたままの歪み美球が沸き立つ淫撃にぶるぶる

るんと震える。肉勃起に突き立ったままの銀針に沿って、つつっと白い雫が零れた。それは銀色の細長い胴体の表層を滑り、突端からぽつりと落ちる。
（む、むね……なにか、も、もれて……はああ、はぁ……むね、どうなって……）
針からの痺れるような刺激が胸の中身を脂肪ごと掻き混ぜ、乳頭を、乳輪を、幾十もの細かな乳腺を、葡萄の房のように詰め込まれた無数の乳腺房を目覚めさせ、急速に母乳を吐き出そうとしていた。肛門は引き締められても、母乳を止める力み具合を紗由璃は知らなかった。乳首の先は熱に浮かされ、大量の染み出すなにかが集中していく。
（ぐぐぅ……だ、だめだ、むねからも一緒に出て……ば、ばかな、こんなの……）
乳房の張りつめが増していった。出産したばかりの母親のように中身が溜まり、爆発の時を待っている。針の刺さる深みが痺れる波を出して肉機能を造り替えていた。排泄の欲求が胸と肛門に同時収束して紗由璃を高みに追い詰める。
「ふぅぐく……ぁ……でぇでるぅ……でてしま、う……ぜんぶ……でて……」
熱に浮かされて紗由璃は碧眼を限界まで見開き、両手にきつく握った頭上の鎖をぴんっと張らせる。全身を苛む強烈な気持ちよさを内包する我慢に打ち震え、噛みしめた歯をぎりりと鳴らした。桜色に炙られた肌が、鬱血に赤みを増していく。
「ほほ、出るのか、出すのか、まったく恥ずかしいくノ一じゃ。出すのは仕方ないがこんなに気持ちよさそうにしおって。やはりいじめられて感じておるではないかっ！」

「ひぃいいいいぃーっ、やぁ、やめっ！　胸、だめ、ぁぁ、だぁ、だめぇぇ――っ！」
針ノ巫女が我慢の限界に全身を突っ張らせた紗由璃の背後から抱きつき、縄に絞り出されて揺れる乳房を下からすくい上げて揉む。掌一杯にとろけた肉を掴み、親指と人差し指の腹で両方の乳首をぐりぐりとしごき潰した。刺さったままの銀針が震える。
「ほほ、そら、出せ、溜まったものを全部だしてしまえぇぇぇーっ！」
「おおおぉ……ぉ……おおおぉあぁぁ……」
小鬼たちになぶられたときのように乳輪は盛り上がり、乳首はそそり立ち、いまにもぴちりとした革地を破って飛び出してきそうなくらい硬くなった。乳口から内部に埋まった針の芯と、指の腹の間に挟まれた乳首の表層の肉が、ぐにゅりぐにゅりと潰されて薄く伸ばされ、こね回される。
全身に雷が降り注いで紗由璃は思わず甘い嬌声を発する。乳腺が内部熱に蒸されて一斉に開いていった。突き出した肉ぽっちの針の根本に白い粒が浮かび上がる。
「やぁやだやめろ、さわるな出てしまう出てしまうから……ぁひぃあああああ――っ」
胸と同時に瓶の中の責めも限界を超えようとしていた。
肛門を埋める触手がぐるんぐるんとネジ巻き器みたいに回りながら、括約筋と汚物を一緒くたに乱れ散らしていたが、不意にぬぬぬぬっ。一息に外に抜け出ていった。紗由璃の最後の力みとともに。鉄のようだった締まりの菊座に穿たれた触手一本分の隙間。そこか

ら我慢の堤防はあっけなく崩れ、瓦解する。ぎゅるるぅと腹が鳴り響くと、堰き止められていた怒濤が灼熱の奔流と化して遂にひり出された。
「っ……ほぉあああぁ……お……んぉおおおぅぅぅっ！」
「ほほ、まだまだじゃ、変態くノ一め、胸の溜まりも全部だしてしまえぇぇぃ！」
強制排便の快感が開始されると同時に、紅い胸の表層が白く染まっていく。漏れ出る感覚とともにずくんずくんと乳房全体が燃えた。
胸と肛門の同期決壊である。
「ぁくぅぅ……でぇぇ、でぇるぅぅ……ぜんぶ……でるぅぅ……っっ!!」
排泄孔が本来の役割を取り戻す。我慢の果てに浅瀬で溜まりに溜まって圧縮され、蓋のようになっていた塊が堰を切って勢いよく飛び出すと、後に続く流れも一本の柔らかな灼熱と化してどんどんとひり出されていった。瓶の口の湖面がぶくぶくと派手に泡立ち、紗由璃の決壊を視覚的に演出した。白濁の深みから無数の羞恥泡が湧き立っては弾けて消える。肛門を内部から焼き尽くす熱塊の拡張に頭の中が白く明滅した。真っ赤に茹だった顔は仰け反り、口の端から涎を飛ばし、瓶の縁に絡めた両脚を何度も跳ね上げさせる。
とてつもない解放感に苛まれ、重かった腹が嘘みたいにどんどんと軽くなっていった。
「ほほほ、見事な脱糞じゃのぅぅぅ。見なされ、派手に糞泡を弾けさせて！」
「あぅぅぅぅーっ！　みぃ、みるなぁぁ、こんなのぉぉ――っ!!」

『第五章　暴かれし姫くノ一、魔獣責めに燃ゆ』より

「ふぅあぁぁ……はぁぁ、はぁぁ……ぁ……身体が……んんぅ！」
紗由璃は男に金髪の髪を掴まれて強引に起こされる。全身でイキきった肢体は薄皮を剥いだ丸出しの神経の塊であり、ちょっと触られるだけでとてつもない過敏の波紋が頭の天辺から手足の末端までを駆け巡った。紗由璃を甘い痛撃で失神させようと企む。
「ひっく……ん……か、感じすぎてぇ……つぅ、つらいか、らぁ……」
「へへ、随分とキてるな、股間にズキズキと響いてきやがる。そら、こっちに乗れ！」
「ぁぁ……ぁ……ま、また、いれる……いれたら、ぁぁ……わ、私は……」
紗由璃は男たちに絶頂後の敏感肌を弄ばれながら、寝転がった男の股間から屹立する肉棒を跨がされる。それは逞しく、鋭く、使い込んだ鈍色で秘裂に狙いを定めきった。
（こ、こんなのがまた入る……もう、気が狂い、そうなのに……）
七日間の調教中、ここまで絶頂に支配されてしまった後は、必ず休息が与えられ、正気に引き戻された。しかし男たちは紗由璃を容易くその先でなぶり続けようとする。
「も、もうぅ、おかしくなるよぉ……はぁ、はあ、おかしくなって……いい、の？」
「いまさらなに言ってんだ、変態くノ一、もうオマエはとっくにおかしいんだよ！」
「っっ……っきゃあああああぁぁぁぁっ――――っっっっっ!!」
紗由璃は騎乗位の格好で、男を根本まで飲み込まされた。排泄物のような黒さを持つ肉槍が蹂躙され尽くした白濁の肉野をさらに貫き、抉り、鍛えられた反り返りの凹凸が絶頂

の残熱で炙られる過敏な膣壁をこそいでいく。肉塊がみっしりと産道全域に居座り、子宮口と亀頭の鈴口が快楽を求め合う熱烈な口づけを繰り返した。腹の奥で男と接吻する。

（はぁあああああぁぁ……あついのが、せいえきと混じって……ああぁ）

びくんびくんと紗由璃は背を反らして全身を痙攣させる。絶頂に絶頂が上書きされ、決して越えさせて貰えなかった一線を紗由璃はあっさりと跨ぐことを許された。

「ぃ……いいのぉ、こ、これいい……おなか……もう一杯でぇぇ……」

紗由璃は涙で濡れた顔でだらしなく己を抱きしめ、肩を痙攣させた。もっと刺激を強めようと腰を震わせながら尻を上げる。大股を開き、土俵入りのように両方の膝に両手をついて、力む。ぬぬぬぅと肉槍が抜けて亀頭が見える辺りで腰を止め、膣の浅瀬のヒダ肉を傘の出っ張りで引っ掻いた。気持ちいい擦れ具合を探すと、自然に腰はぐりんぐりんと円の運動をするようになる。紗由璃は犬みたいに舌を垂らしながら、腰を回しきる。

「げははははは、なんだ、こいつ。もう完全にできあがってやがるぜぇ」

「んん……でっぱりこすれて、いい、いいのぉぉ……っっんひぃぃぃーっ！」

ずんっと思いっきり腰を落とす。凄まじい喜悦が背から頭に走り抜け、紗由璃はそれこそが親の敵であるように繰り返し尻を男の腹に叩きつけた。肉の尖りを腹に飲み、解禁された法悦の極みに向かって挿入の硬さをじっくりと堪能する。何度も何度も何度も。

（あはぁぁ、こ、こわれてるぅぅ、ぜ、ぜんぶ、こわれて……こわれちゃうぅぅぅっ）

活火山のような不断の欲望が肉に蠢く。凄まじいほどにぞくぞくとした。理性も常識も恥も外聞も、なにもかも根こそぎ失ってきた紗由璃は、最後に自分を失っていく。気持ちのよい急所の深くを精力的な肉棒で突かれ続け、己を忘れていった。

「はあ、はああん、いいぃ、カリの開いてるのがぁ、ま、ま○こぉ、擦ってきてぇぇ」

一突きごとに紗由璃は頭を真っ白くさせ、泣き叫ぶ。いまこの瞬間こそが至高の快楽に間違いなかった。長く太い反り返りの切っ先でぐちゃぐちゃと膣を掻き回しながら、根本までぶちゅりと何度も飲み返す。混じり合いの本気汁が飛んだ。

「こんなにじっくりと楽しまれたら、百の精に達するまで何時間かかるか判らねぇぞ」

「な、ならまとめて、おちんちんまとめて入れてよいから……っっ！」

止めどない牡根への求めが紗由璃を支配していた。その提案はすぐに実行される。別の男が赤銅色の抜き身をしごきながら紗由璃の背後を取ってきた。新しい喜悦の予感に紗由璃はごくりと唾を飲む。既に繋がっている秘裂に二本目が捻り込まれた。

「ぃひぃぃぃぃっっ――――っっっ!!」

男たちが二人同時にめりりと膣内に押し入ってきた。一本が蒸れた秘裂を上側から押し開いて挿入してくると、下側の肉厚もさらに美肉を支配しようと、ぬぬぬと同期して深みに侵入してくる。ぞくぞくで気絶しそうになった。気が狂いそうに、おかしくなる。

「くぅひぃぃぃぃぃぃーっ、いいのぉ、これいいぃぃ、ああ、すごいっ――――っっ!!」

いままで崩壊間際まで追い込まれながら、保たなければならなかった自我にびきんびきんと罅が走る。蜜壺の悦楽と交じり、目の前で苛烈な火花と化して爆ぜ回った。

「すぅ、すごい、こ、こんな、二本が、いっぱいでぇぇぇ……ぃいひぃ――っ!!」

悦び勇んで叫ぶ紗由璃にぐりぐりりりと肉の圧力が加わった。

男たち二人分の欲望が申し分のない快楽の拡張を強いる。太く長い上質な双根による同時挿入が壊れかけた自我を完全に瓦解させ、獣の本能を剥き出しにしていった。人であるすべてのしがらみから解き放たれ、紗由璃は禁断の性悦の涅槃に辿り着く。

「うぅぐぅぅぅ……ひゃがぁぁ、すぅぅぅごぉぉいぃぃぃ……ぁおおぉぉぉ……」

「たまんねぇ、二本はいっちまいやがったぜ。だがまだまだ、今度は尻にもよぉ」

後背位で紗由璃の尻を支配した男が右にずれ、反対側からもう一人の男が屹立をしごきながら腰を入れ込んできた。亀頭の先端がひたりと当たったのは肛門孔である。

「ほ、ほじる、のっ!?　ぁ……さ、さゆり、またおしり、ほ、ほじられるぅぅ!?」

紗由璃は自分の尻を腰巻き越しに撫で回し、それからぺろりと裾を捲り上げた。丸出しになった尻に、男が背後から容赦なく溶けた肛門をずずずと貫いていった。

「ひぃくぐぅぅ……こぉ、こわれる、こ、こわしても、いいからぁ……」

拡張の果てに泥みたいに融解した秘部に挿入された二本が膣道の上下を支配し、新たな異物がさらなる高みから二本を薄肉壁越しに押し潰す。紗由璃は大きく開いた口から涎と

舌を垂らし、紅唇をわななかせた。上から背中を押され、下の胸板で乳房が潰れる。起ちきった乳首がくにゅっと根本から折れて気色よかった。前も後ろも、敏感な肉壁に野太さが隙間なく密着し、屈服させられる、深い繋がりが紗由璃の中を肉悦の幸福で満たしきる。
「はぁ、はいってるぅ、あはぁ、いっぱい、おなかぁにぃ、たくさんぅぅ――っ！」
律動が始まった。紗由璃は男たちに背後から捕らわれたまま、桜色の女肉を積極的に与え続けた。ばらばらで滅茶苦茶な突き込みが性神経を悦楽で焼き焦がしていった。
「はぁひぃぃ、す、すごい、これすごい、きもちいい、ひらいたま○こきもちいいぃ」
同期律動が始まれば羅黒の責めとは別種の拡張感が紗由璃の頭を甘い電撃で痺れさせていった。三本がまとめて紗由璃の牝欲を掻き回す。新たな交わりに頭が爛れた。
「んんぅ、おしりもいいぃ、これ、はじめ、てぇぇ、三本挿し、本物のおちんぽで三本挿されるの初めてえぇぇぇぇぇ――っ！　っっきもちいひぃぃ――――っっ!!」
「なんて下品な女だっ、そんなにきもちいいのかよぉ!!」
どうにもならない、叫ばずにはいられない紗由璃の卑語絶叫に男たちも応えて淫杭を叩きつけてくる。乳首に甘い疼きが集中し、とろりと先走りの白濁が蜜みたいに糸を引いて垂れていった。三根の律動に高ぶる紗由璃の顔の前に別の陰茎が差し出される。
「この変態牝め、すっかり発情しやがってぇぇ……こっちも根本までたっぷり舐めろ」
「は、はつじょうして、してるぅ……さゆりは、もう……発情で、きもちいいのっ！」

上目遣いに男を見上げ、情欲で淫らに頬を染め上げながら、差し出された亀頭に大胆にむしゃぶりつく。もう壊れてしまった。壊れていいのだ。

紗由璃の激しい口淫に双乳も悦びに満ち溢れるようにぶるんぶるんと弾んで揺れる。舌肉を伝って新鮮な甘い苦みが口内に入り込み、紗由璃はたまらず腰を悶えさせた。

「んむぅぅ！　ん……んぐ……むぅ……ふむうぐぅぅ……っっっ」

「ようやく本性を現しやがった、この女。おお、すげえぇ、スッポンみたいに……」

「むぐ……んぬぬむっ……ぶぶ……んぶぅるぅ……はぁぶっ！」

陰茎の硬さを手でひたむきにしごきながら、根本までたっぷりと飲み込む。唾液をまぶした紅唇の輪が抜き身の反り返りの胴体の表層を滑り、妖しく濡れ光らせていった。

「中と口だけじゃ全然おっつかねぇっ！　みんなでぶっかけてやれ」

群がってきた男たちが順番も守らずに限界勃起をしごきながら淫熱に焼ける紗由璃に群がってきた。周囲に起つのは陰茎、陰茎、陰茎ばかり。牡の臭気が紗由璃を狂わせる。

「ぁは……あはは……い、いっぱいくらさいぃぃ……もっと……くさいのぉぉ……」

果てのない牡の欲望が爆発する。紗由璃は三本に責められたまま膝立ちになって背を反らすと、大きな胸を自分の腕で囲むようにぎゅむりと抱え込み、その歪んだ肉球の合間に勃起した肉尖りを、にむむと受け入れた。男は中腰になって気色ばみ、必死の上下運動で反り返りをしごいてくる。そのはしゃぎようが紗由璃の母性をきゅんと刺激した。

「ひひひ、こりゃ、たまらん。あそこやケツ孔よりいいかもしれねぇぇ！」
「ん、んびゅんんぅ……にむむ……」
紗由璃は濁液にぬめって胸の谷間から目の前に飛び出る赤銅色の尖りを唇であやし、舌で舐め尽くし、亀頭をくりゅくりゅと紅唇で接吻し、先走りを味わった。他の男たちも紗由璃の胸の曲面の丸みに亀頭を擦りつけて硬い肉槍をしごき、快楽を増幅させる。ふくらみの弾力に尿道が滑り、肉筆がとろみの跡を描いた。太い胴体が横殴りに振られて、ばちんばちりと胸のふくらみを叩く。あらゆる方法で乳房を責め苛まれ、紗由璃は被虐の愉悦に打ち震えた。胸をさらにぎゅっと抱きしめ、淫塊の餅肉をはみ出させる。
閉じた腕と脇の下の合間にも後ろから陰茎が突っ込まれた。汗ばんだ脇を通り、左右にそれぞれが出たり入ったり。鬱血した亀頭は正面から見れば黒い真珠のようだ。二の腕のふくらみと胸の横肉に挟まれながら脇に残る忍び装束の革地にも擦られる。紗由璃は反り返りをきつくして飛び出す左右の勃起の伸張が最大になったとき、口で捕まえて甘噛みし、くりくりと舌先で舐めてやった。反対が出てくればそちらもくりくりと舐めあやす。
「んんぅ、あんぅ、わぁ、脇の下でがんばってるぅ、脇の下なのにがんばってるぅぅ」
健気なしごきが紗由璃の新たな性感を暴き立てるように開花させ、敏感な脇の下の窪みを刺激される強さにも股間が濡れた。さらに男たちが腰を一杯に寄せつけ、頭の髪や耳の孔、尻肉や背中、太腿などに狙いを定め、懸命に密着感を高めてしごきつける。

「ぃ、いっぱいなの、おちんこいっぱいで、ぜんぶさゆりでイクのぉ、さゆりでぇぇぇ」
紗由璃は牡を昂揚させるような媚びた声で叫び、二の腕で胸ごと一物を挟みながら、両手にも勃起を掴み、目の前に並ぶ硬い亀頭をしゃぶり回した。乳首も負けずに硬くなる。
「あぁぁぁぁ、むねもきもちいい、ちくびきもちいいの、こ、これちんこみたいぃ」
乙女の象徴を目の前の陰茎と同列に並べた。嬉しくて気色よくてぞくぞくする。金色の髪にも肉棒が絡まり、背中の忍び装束の革地にも熱さが擦りつけられる。両脚の紅い脚絆にも。紗由璃は全身で男を愛撫する。顔の左右にも黒々とした一物たちが飛び出した。
「んぅ、んぶぅぅ、はぁ、んんん、うぶぶぅ」
紗由璃は卑猥な口淫で眼前の硬直をたっぷりと慰める。横笛のように胴体部分が紗由璃の紅唇を滑り、唾液と先走りの液でねとねとと艶光りに深みを増していった。
「そら、こっちもいじってやるよ、このぐちゃぐちゃのま〇こもなぁぁ」
「はぐぐぅぅ……ひぃひぬぅぅ、びりびりしてひんぢゃうううよぉぉぉ――っ」
むちゅり。接合したままの秘裂に顔を突っ込んできた男が紗由璃の尖った抜き身の急所を吸い、舐め回してきた。ちゅばちゅばと卑猥な口が乙女の淫核を吸引して舐め回す。
「っっっほぉぉぉぉぉぉ――っ、つ、つよすぎ、お豆つよすぎぃぃぃ――――っ!!」
紗由璃は背筋を反らしながら、腰をがくがくと震わせる。身体中に擦りつけられる肉竿たちが放つ牡の淫猥で濃密な空気と愛撫が、紗由璃の快楽も熱く蒸らす。身体中が甘く痺

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/